

コミュニケーション力を高めるために

はじめに

昨今、青少年のコミュニケーション能力の低下が指摘されています。その背景として、生身の人間同士のコミュニケーションの機会が減り、会話によって人と人とのつながりを紡いでいく力が低下してきているのではないかという意見や、情報ツールの多様化及び普及による情報化の急速な進展が背景にあるのではないかという意見もあります。人とつながる力は、即ち、生きる力であり、青少年育成を考える上で極めて重要な課題です。



藤原和博氏(前・杉並区立和田中学校長 / 東京学芸大学客員教授)

青少年育成全国大会の開催

内閣府では、平成20年(2008年)1月27日、東京都において、「人とつながる力『コミュニケーション力』を高めるために」をテーマに「青少年育成全国大会」を開催しました。

本大会でご講演いただいた前・杉並区立和田中学校長、東京学芸大学客員教授の藤原和博氏の講演内容の一部を紹介いたします。

子どもたちがコミュニケーション能力を失う3つの理由

なぜ子どもたちがコミュニケーション能力を失うのか、3つの理由を挙げたいと思います。

1つは、超便利社会が発展していること。例えば、子どもたちが、コンビニに行きます。「ジャンプ」という漫画が大好きで、20分立ち読みして、コーラ1本買って帰ってくる。子どもたちは、何か一言でも発する必要があるでしょうか。ないですね。何にもしゃべらなくていい。昔皆さんが買物された時には、コミュニケーションが常に起こっていました。つまり、下手しますと、今の子は障害のあるなしにかかわらず、恐らく20歳くらいまで、全く言葉を発しなくても生きられてしまうのではないかと思います。

2つ目は、子どもたちからコミュニケーションを奪う、もしくはコミュニケーションをしようとする意欲を奪うもの。それは「テレビ」と「携帯」です。

平均して子どもたちは1日にどれくらいの時間数テレビを見ているでしょうか。約3時間です。365日で1,000時間を超えて子どもたちはテレビを見ていることになります。ゲームを加えると、総ディスプレイ視聴時間ということになりますが、これは4時間を超える。そんな子は、もうざらにいます。

一方、学校での授業を1年に何時間くらいやっていると思いますか。体育も道徳も全て入れて800時間です。例えば中学生であれば英、数、国、理、社の5教科。小学生であれば4教科、これは1年間で何時間やっていると思いますか。全て合わせて400時間です。400時間対1,000時間のテレビ。テレビの勝ちです。

ですから、和田中では、「テレビを2時間以上つけっ放しにする家庭のお子さんの学力は保証しません」とはっきりと入学式の時に言います。

携帯では、大体何回くらいショートメールの交換が1日に起こるでしょうか。200回くらい軽くやります。大体夜の12時から2時くらいにかけてやると思います。携帯メールで起こっているやりとりというのは、大概が独り言の応酬と私が言うようなたぐいのやりとりです。自分のことをひたすら語る、それを時間のはざま、はざまに埋めていくという、こういうコミュニケーションです。

価値観が多様化し、社会の仕組みが複雑化し、そして、変化が激しくなる。そういった成熟社会になると、みんな一緒ではなくなります。それぞれ一人一人の世の中になります。これが非常に恐怖です。ものすごく恐怖です。大人だって恐怖です。だから、何とかつながってほしいという感じがあるわけです。

3つ目は、子どもたちのコミュニケーションにダメージを与えるもの。それは実は学校の社会にあります。「正解主義」という、1足す2は3とか、鎌倉幕府はいい国つくろう、1192年から始まったみたいな感じで、学校では正解だけをずっと教えていきます。そうすると、子どもたちは思考停止してしまい、何にでも正解があると思ってしまう。例えば、会社でも、入って半年もしないで、3か月くらいで、この会社は正解でないとか、この仕事は本当の自分には合わないと言って辞めてしまうわけです。

「正解が一つでない」ことを、大人と子どもと一緒に学ぶ

「正解主義」ではなく「修正主義」で生きていかないと、成熟社会ではつらいということをもっと教えていかなければならない。修正していくことの方が大事だということをお伝えしなければなりません。そのために誕生したのが、「よのなか科」という教科だと思ってください。「正解が1つではない」ことを、「修正主義」で考えていく。その思考方法を学ぶ授業が特徴です。

もう一つは、大人と子どもと一緒に学ぶという特徴を

持っています。子どもたちだけに大人が教えるのではない。大人も正解を知らないのです。

それを子どもたちと一緒に考えていく。大人と子どもと一緒に学べる授業、それが「よのなか科」です。つまり正解が1つではないことを投げかけ、大人と子どもが一緒になって考える、それがアイデアのコンテストみたいなものだったり、あるいは問題解決だったり、あるいはその推理するようなことだったり、ということです。

「斜めの関係」が、子どもたちのコミュニケーションを豊かに育てる

学校の中に「地域本部」を作って、そこにお兄ちゃん、お姉ちゃん、おじさん、おばさん、おじいちゃん、おばあちゃんを入れて、生徒たちとの間で斜めの関係を豊かにさせるというチャレンジ、それが「地域本部」です。

今、和田中には学生ボランティアが40人くらいいて、毎週15人から20人が通って来ますが、5年前に最初に始めたのは、たった1人。たった1人に来てもらって、15人くらいの生徒が、その週に出た宿題を片づける。家にいたら、分からなくなった途端につまらなくなってしまふから、お兄ちゃん、お姉ちゃんがいなければ無理ですね。

昔の地域社会だったら、お母さんが、ちょっとあのお兄ちゃんに聞いてきなさいとか、あるいは兄弟が多ければお姉ちゃんに聞いてもいいけれども、今の子はそういうことができないのです。だから、こういう装置を作ってあげないと、お兄ちゃん、お姉ちゃんとの関係もできないわけです。そういう斜めの関係が、実は子どもたちのコミュニケーションを活性化していきます。上下の関係ではない。お父さん、お母さんと子どもの関係では、やはりどうしても命じる口調になってしまいます。あるいは駄目だったら怒るでしょう。先生、生徒もそうなのです。縦の関係だと、どうしてもコミュニケーションを切るようなコミュニケーションになってしまう。だから、斜めの関係こそがコミュニケーションを豊かに育てていくわけです。

人間関係も家のようなものです。縦の関係というのば「柱」です。それから横の関係は「梁」です。それだけだと地震が来ると倒れてしまう。だから、「筋交い」、斜めの関係が必要です。ちょっとやそっとの人間関係の揺れでもびくともしない子を育てるためには、この斜めの関係をもう一度復興する必要があります。そのためにはぜひ皆さんの力をお貸しいただきたい。

最後に、この「地域本部」につきましては、文部科学省のほうで、もう今年50億円の予算をとって、これを全国に、和田中方式の「地域本部」という地域を学校の中に作る動きを広めようではないかということで、約1,800か所できると予定されています。それにもぜひ皆さんのお力をお貸しください。

青少年育成全国大会 基調講演参考資料

前・杉並区立和田中学校長 / 東京学芸大学客員教授 藤原和博

保護者への5つのお願い

1. 和田中を選んでくれた以上、責任をもって参画していただけます

学校へ預ければ自動的に息子や娘が育って出くわけではありません。本校の教育目標「自立と貢献」にあるように、保護者には学校に貢献する意識を持っていただきます。授業も十分に参観しうえて学校を評価して下さい。

2. 生徒の生活習慣が規律を持ったものになるようご協力下さい

規則正しい起床・就寝の時間管理、遅刻をさせないこと、挨拶、宿題や提出物・忘れ物のチェック、服装と身だしなみ、靴のかかとを踏まない、ズボンからシヤンを出さない、スクートを折り込んで短くない、化粧しないなどは常識の範囲です。さらに、朝食を必ず食べさせることなど、基本的な生活習慣に属することは家庭の責任で指導して下さい。

3. テレビをつけっぱなしで見せている家庭の子の学力は保証しません

テレビは1日1時間強まで、番組を選んで見せて下さい。これ1年間のテレビの視聴時間が約400時間となり、英数国理社5教科の年間総授業時数と並びます。2時間以上つけっぱなしで見ていると年間800時間以上となり、考える力に著しいダメージを与えます。テレビを1時間に押さえ、そのかわり自宅学習を1時間15分以上させれば、自宅での勉強が年間に400時間積み増され、確実に学習したことが定着するでしょう。読書も保護者が率先してするようお掛け下さい。大人が読書しなければ、子どもが読書するようにはなりません。

4. ケータイは持ってこさせない、自転車通学はさせない

ケータイは学校への持ち込みを禁止しています。働いている保護者には不便かもしれませんが、持たせている場合には一度自宅に帰ってから使うようにして下さい。学校で見つけた場合は保護者に来ていただく必要があります。自転車も事故が多いので禁じています。なぜ通学に使えないか、子どもにはあなたには大人として事故の責任がとれないからだとおぼろげに伝えて下さい。なお、バス通学は許しています。

5. 子どもに仕事を与えること、続けさせること

子どもには、家庭でさまざまな仕事を分担させて下さい。学校でも毎週水曜日の朝に掃除をする「水曜ボランティア」や職業体験での保育園・老人ホームでのケア、あるいは近くのホームへの合唱・合奏の慰問など多くのイベントがありますが、日常的な仕事の分担と地域でのボランティア活動は職業意識の自然な醸成に必須です。

家族の一員として当然やるべき仕事や勉強の成果としての成績の上昇に対して、金品を動かすだけの手段とすることは避けて下さい。「ありがとう！よくがんばったね」という親子の言葉の交流こそが自己肯定感 たいじょうぶ、自分には居場所があるという確信 育てます。

また、いったん始めたことは、中学3年間身につけた資産となるよう、是非とも続けさせて下さい。苦しいこともあったが続けられたという自信と「集中力」は一生の財産になります。

藤原和博氏が、和田中学校長在任中に、入学式や保護者会で保護者に繰り返し配ったもの